平成 27 年度共同研究報告書

団地に居住する要支援者の生活支援に関する調査研究

菱沼幹男、大島千帆、児玉桂子、菊池いづみ、倉持香苗、佐藤惟

Ⅰ．研究の背景

高齢化の進んだ団地では、認知症への対応困難による近隣トラブルも散見されているが、建築・住宅分野等における認知症への理解はまだ不十分である。さらに、「エイジング・イン・プレイス」（地域居住）が重視され、地域包括ケアシステムが整備されていく中で、人生の最期を現在の住居で迎える人も増えることが予想されるが、環境面でも人々の意識の面でも、その準備が十分整っているとは言い難い。一方で高齢化が進む団地においても、子育て中の世帯も暮らしており、多様な生活ニーズを抱えながら暮らしている状況にある。少子高齢化が進む団地で暮らす人々の生活を支えていくためには、その生活実態を明らかにしていくことが不可欠である。そこで本研究では、これまで大学として継続的に関わっている滝山団地（東京都東久留米市）において全世帯調査を行い、今後の生活支援について考察を行うものである。

Ⅱ．調査の概要

研究目的：UR 都市機構の団地には、近年ますます多様な世帯が入居するようになり、様々な生活ニーズが生じている。その中でも特に、少子高齢化の進展が顕著であることを踏まえ、本研究では認知症および最期の迎え方、子育て支援をはじめする地域活動に関する住民の意識を調査し、団地における今後の生活支援課題を明らかにする。

調査対象：滝山団地（東京都東久留米市）全世帯 3,010 世帯

調査時期：平成28年1月～2月

調査方法：説明文書、アンケート調査票、返信用封筒を滝山団地自治会の協力により全戸配布し、郵送および自治会ポストへの投函によって回収した。

回答者数：686 件(回収率 22.8%)

調査項目：世帯状況、回答者の状況、子育て支援活動、認知症、終活の４カテゴリー(31 項目)を設定した

倫理的配慮：回答者のプライバシー保護・研究倫理を記載した説明文書を調査票に同封し、調査票の返送をもって回答者からの同意が示されたものとした。

Ⅲ．調査の主な結果

１．世帯の状況

回答された世帯の世帯主年齢を５群に分けると、20～50 歳代が 96(14.0%)、60 歳代が 163(23.8%)、70 歳代が 274(39.9%)、80 歳以上が 147(21.4%)であり、約 6 割の世帯主が 70 歳以上であった(表 1)。世帯主の性別は、男性が 447(65.2%)、女性が 235(34.3%)で　あった(表 2)。なお回答者の属性は、世帯主が 448(65.3%)、世帯主以外が 108(15.7%)、不明・無回答が 130(19.0%)であった。

表１　世帯主の年齢（５群）

	度数	%
20～50 歳代	96	14.0
60 歳代	163	23.8
70 歳代	274	39.9
80 歳以上	147	21.4
不明･無回答	6	0.9
合計	686	100.0

表２　世帯主の性別

	度数	%
男性	447	65.2
女性	235	34.3
不明･無回答	4	0.6
合計	686	100.0

家族類型を７群で区分すると、単身高齢世帯 196(28.6%)、単身中年世帯 48(7.0%)、2 人高齢世帯 256(37.3%)、2 人中年世帯 40(5.8%)、3 人以上高齢世帯 75(10.9%)、3 人以上中年世帯 61(8.9%)であり、回答された世帯の 75%が高齢者だけで生活していた(表 3)。また世帯人数では、1 人世帯 245(35.7%)、2 世帯 299(43.6%)、3 人世帯 96(14.0%)、4 人世帯 35(5.1%)、5 人世帯 4(0.6%)、6 人世帯 1(0.1%)であり、約 3 割が単身世帯であった (表 4)。

表３　家族類型

	度数	%
単身高齢	196	28.6
単身中年	48	7.0
2 人高齢	256	37.3
2 人中年	40	5.8
3 人以上高齢	75	10.9
3 人以上中年	61	8.9
不明･無回答	10	1.5
合計	686	100.0

表４　世帯人数

	度数	%
1 人	245	35.7
2 人	299	43.6
3 人	96	14.0
4 人	35	5.1
5 人	4	0.6
6 人	1	0.1
不明･無回答	6	0.9
合計	686	100.0

２．居住の状況

滝山団地へ入居してからの期間について、5 年未満が 74(10.8%)、5～9 年が 60(8.7%)、10～19 年が 103(15.0%)、20～29 年が 77(11.2%)、30～39 年が 124(18.1%)、40 年以上が 216(31.5%)であり、回答された世帯の約 5 割が 30 年以上居住している一方で、約 1 割が 5 年未満であった(表 5)。また、住宅の種類については、賃貸が 284(41.4%)、分譲が 380(55.4%)、分譲賃貸が 19(0.4%)であった(表 6)。

表 5　入居期間

	度数	%
5 年未満	74	10.8
5～9 年	60	8.7
10～19 年	103	15.0
20～29 年	77	11.2
30～39 年	124	18.1
40 年以上	216	31.5
不明・無回答	32	4.7
合計	686	100.0

表 6　住宅の種類

	度数	%
賃貸	284	41.4
分譲	380	55.4
分譲賃貸	19	2.8
無回答	3	0.4

３．生活の状況

現在の生活への満足度については、満足が 46(6.7%)、まあ満足が 151(22.0%)、普通が 325(47.4%)、やや不満が 96(14.0%)、不満が 29(4.2%)であり、約２割が不満を感じていた(表 7)。また経済状況については、余裕があるが 22(3.2%)、やや余裕があるが 43(6.3%)、普通が 369(53.8%)、やや苦しいが 163(23.8%)、苦しいが 79(11.5%)であり、約 3 割が経済的な苦しさを感じていた(表 8)。

表 7　現在の生活への満足度

	度数	%
満足	46	6.7
まあ満足	151	22.0
普通	325	47.4
やや不満	96	14.0
不満	29	4.2
無回答	39	5.7
合計	686	100.0

表 8　経済状況

	度数	%
余裕がある	22	3.2
やや余裕がある	43	6.3
普通	369	53.8
やや苦しい	163	23.8
苦しい	79	11.5
無回答	10	1.5
合計	686	100.0

健康状態については、良いが 104(15.2%)、まあ良いが 162(23.6%)、普通が 282(41.1%)、あまり良くないが 94(13.7%)、良くないが 11(1.6%)であり、健康状態が良くないと感じているのは約 1.5 割であった(表 9)。また、近所付き合いについては、多いが 24(3.5%)、やや多いが 44(6.4%)、普通が 304(44.3%)、やや少ないが 117(17.1%)、少ないが 192(28.0%)であり、約 3.5 割が近所付き合いが少ないと感じていた(表 10)。

表 9　健康状態

	度数	%
良い	104	15.2
まあ良い	162	23.6
普通	282	41.1
あまり良くない	94	13.7
良くない	11	1.6
無回答	33	4.8
合計	686	100.0

表 10　近所付き合い

	度数	%
多い	24	3.5
やや多い	44	6.4
普通	304	44.3
やや少ない	117	17.1
少ない	192	28.0
無回答	5	0.7
合計	686	100.0

別居の親族と会う頻度については、週 3 日以上が 44(6.4%)、週 1～2 回が 85(12.4%)、月 2～3 回が 109(15.9%)、月 1 回が 113(16.5%)、年に数回が 198(28.9%)、年に 1 回以下が 65(9.5%)、別居の親族はいないが 51(7.4%)であり、約 4 割が月 1 回に満たない頻度となっていた(表 11)。また外出頻度については、ほぼ毎日が 393(57.3%)、週 4～5 日が 143(20.8%)、週 2～3 回が 102(14.9%)、週 1 回が 22(3.2%)、月 2～3 回が 12(1.7%)、月 1 回が 8(1.2%)、ほとんど外出しないが 3(0.4%)であり、約 8 割が週 4 日以上外出している一方で、ごく少数であるが外出が非常に少ない方々がいた(表 12)。

表 11　別居の親族と会う頻度

	度数	%
週 3 日以上	44	6.4
週 1～2 回	85	12.4
月 2～3 回	109	15.9
月 1 回	113	16.5
年に数回	198	28.9
年に 1 回以下	65	9.5
別居の親族はいない	51	7.4
無回答	21	3.1
合計	686	100.0

表 12　外出頻度

	度数	%
ほぼ毎日	393	57.3
週 4～5 回	143	20.8
週 2～3 回	102	14.9
週 1 回	22	3.2
月 2～3 回	12	1,7
月 1 回	8	1.2
ほとんど外出しない	3	0.4
無回答	3	0.4
合計	686	100.0

４．子育て支援に関する意識

子育て支援に関する意識については、「現在、子育てに関する悩みがある」が 17(3.5%)、「近所で、気になる子どもを見かけることがある」が 19(3.9%)、「近所で、子育てに困っているのではないかと思う家庭がある」が 18(3.7%)、「その他、子育てに関する支援が必要だ

と感じることがある」が 31(6.4%)、「上記のいずれにもあてはまらない」が 412(85.5%)であり、回答者全体からみればごく少数ではあるが、子育てに関する悩みを有している世帯や、周りが気にかけている子育て世帯があることが見えた(表 13)。また、子育て支援活動への意向について、利用したい活動として最も人数が多かったものは、放課後や休日の「学習支援」であり、これはボランティアとして参加したい活動としても最も人数が多かった(表 14)。

表 13　子育て支援に関する意識

	度数	%
現在、子育てに関する悩みがある	17	3.5
近所で、気になる子どもを見かけることがある	19	3.9
近所で、子育てに困っているのではないかと思う家庭がある	18	3.7
その他、子育てに関する支援が必要だと感じることがある	31	6.4
上記のいずれにもあてはまらない	412	85.5

表 14　子育て支援活動への意向

	利用したい	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱとして参加したい
子育てに関する情報交換の場	12	11
週末に行う「子ども会活動」	5	28
放課後や休日の「学習支援」	22	29
その他	3	9

５．認知症に関する意識

世帯内に認知症と診断された人がいるかどうかについては、いるが 32(4.7%)、いないが 574(83.7%)であり、全体から見れば少数ではあるが、団地内に認知症のある家族と同居している世帯が暮らしている(表 15)。また、自分が認知症になることへの不安については、よくあるが 62(9.0%)、時々あるが 300(43.7%)、あまりないが 177(25.8%)、まったくないが 49(7.1%)であり、約 5 割が認知症になることの不安を感じている(表 16)。

表 15　世帯内に認知症と診断された人の有無

	度数	%
いる	32	4.7
いない	574	83.7
わからない・知らない	23	3.4
無回答	57	8.3
合計	686	100.0

表 16　自分が認知症になることへの不安

	度数	%
よくある	62	9.0
時々ある	300	43.7
あまりない	177	25.8
まったくない	49	7.1
わからない	51	7.4
不明・無回答	47	6.9
合計	686	100.0

また、団地内で「認知症ではないか」と思われる人を見かけたことについては、あるが235(34.3%)、ないが281(41.0%)、わからない・覚えていないが122(17.8%)であり、約3割が団地内で認知症ではないかという方を見かけている(表17)。認知症ではないかと思った状況については、回答が多かった順では「何度も同じ話をする」が77(35.0%)、「何時間もベンチなどにぼーっとして座っている」が54(24.5%)、「大きな声を出しながら歩いている」が53(24.1%)であり、その他、道に迷っていたり、季節にあわない服装、以前会ったことを覚えていないなど、日々の生活の中で認知症への気づきを感じている人々がいることが分かった(表18)。

表17 団地内で「認知症ではないか」と思われる人を見かけたこと

	度数	%
ある	235	34.3
ない	281	41.0
わからない・覚えていない	122	17.8
不明・無回答	48	7.0
合計	686	100.0

表18 「認知症ではないか」と思った状況

	度数	%
何度も同じ話をする	77	35.0
何時間もベンチなどにぼーっとして座っている	54	24.5
大きな声を出しながら歩いている	53	24.1
住まいがわからなくなり道にまよっている	44	20.0
服装が季節に合っていない	34	15.5
以前に会ったことを覚えていない	29	13.2
同じものをくり返し購入する	12	5.5
ゴミを分別できない	12	5.5
家の中がゴミで溢れている	7	3.2
その他	64	29.1

５．終活に関する意識

「終活」への関心については、関心があるが242(35.3%)、少し関心があるが256(37.3%)、あまり関心はないが62(9.0%)、関心はないが28(4.1%)、わからないが40(5.8%)であり、約7割が関心を持っていた(表19)。最期を迎えたい場所については、こだわりはないが最も多く246(35.9%)、次いで自宅が176(25.7%)、病院が152(22.2%)、高齢者施設が27(3.9%)、別居の家族の家が7(1.0%)、その他が16(2.3%)であり、特定の場所を強く希望しているわ

けではない方が約 3 割を占めたが、病院と高齢者施設を合計すると、自宅を希望する割合とほぼ同数であった(表 20)。

表 19　「終活」への関心

	度数	%
関心がある	242	35.3
少し関心がある	256	37.3
あまり関心はない	62	9.0
関心はない	28	4.1
わからない	40	5.8
不明・無回答	58	8.5
合計	686	100.0

表 20　最期を迎えたい場所

	度数	%
自宅	176	25.7
病院	152	22.2
高齢者施設	27	3.9
別居の親族の家	7	1.0
こだわりはない	246	35.9
その他	16	2.3
不明・無回答	62	9.0
合計	686	100.0

終活に関する希望については、「そう思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 5 件法で質問し、「そう思う」と「ややそう思う」の合計人数が希望する人数が多かった順に見ると、「『荷物の整理』を進めたい」が 542 人、「『認知症などで判断能力が衰えたとき、頼る人』を決めておきたい」が 381 人、「『自分が入るお墓』について希望がある」が 313 人、「『自分の葬儀の方法』について希望がある」が 309 人、「『終末期医療の希望』を記した文書を準備したい」が 287 人、「『遺影用の写真』を準備したい」が 226 人、「『相続に関する遺言書』を準備したい」が 225 人であり、自分自身が亡くなった後の具体的な手続きや、意思表示が困難となった時に備える準備についての希望が多かった(表 21)。

表 21　終活に関する希望

	そう思う	やや そう思う	合計
「荷物の整理」を進めたい	348	194	542
「認知症などで判断能力が衰えたとき、頼る人」を決めておきたい	222	159	381
「自分が入るお墓」について希望がある	245	68	313
「自分の葬儀の方法」について希望がある	218	91	309
「終末期医療の希望」を記した文書を準備したい	158	129	287
「遺影用の写真」を準備したい	124	102	226
「相続に関する遺言書」を準備したい	110	115	225
「親しい人へのメッセージ」を書き残したい	79	98	177
死後も、誰かに自分のことを思い出してほしい	65	76	141
自分の人生経験を、誰かに語り伝えたい	30	40	70
「自分史」を本などの形で残したい	19	26	45

また、「終活」の準備を相談できる人や頼れる人については、多かった順に、団地外の親族が 294 人、団地外の友人が 126 人、団地内の親族が 84 人、団地内の友人が 71 人、主治医が 30 人、ケアマネジャーが 23 人、自治会が 18 人、葬儀屋が 13 人、近所の人が 11 人、生活支援アドバイザーが 8 人、ホームヘルパーと訪問看護師がそれぞれ 3 人であり、その一方で、いないと回答された方が 144 名であった(表 22)。

表 22「終活」の準備を相談できる人・頼れる人

	はい	いいえ
団地外の親族	294	338
団地外の友人	126	506
団地内の親族	84	548
団地内の友人	71	561
主治医	30	602
ケアマネジャー	23	609
自治会	18	614
葬儀屋	13	619
近所の人	11	621
生活支援アドバイザー	8	624
ホームヘルパー	3	629
訪問看護師	3	629
その他	76	556
いない	144	488

Ⅳ．考察

今回の調査は滝山団地の全世帯を対象に実施したが、結果として回答者の約 75%が高齢者のみで生活されている状況であり、子育て支援活動に関する意識については、若い世代の声を十分に把握することができなかった。しかしその一方、団地で生活する高齢者が認知症や終活をどのように捉えているかが明らかとなった。特に終活に対しては高い関心が示され、具体的には自分が亡くなった際の住居や葬儀に関することや、自分が認知症等により意思表示が困難となった際の支援についてのニーズがあることが明らかとなった。現在、要介護認定者に対する支援は整備されつつあるが、身寄りのない高齢者が人生の最期を迎えるための支援は十分に整っているとは言いがたい。こうした状況から今回の調査では、終活の準備を相談できる相手として、親族や友人を挙げる人々が非常に多く、公的機関や専門職への相談が非常に少ないことも明らかとなった。今後、安心して人生の幕を閉じることができるように、多様な学習機会の設定や、自らが判断し行動できるうちに準備を進めていくためのサポート、そして死後事務に関する支援体制の整備等が必要である。

また、現在においても経済的な困難や健康面での問題、近所付き合いの弱さを抱えた人々が暮らしている実態がある。これは、安心して暮らし続けることができる低廉な家賃による住宅供給や、地域内の交流活動の重要性を示す結果であるとも言える。

滝山団地とは継続的な関わりを続けており、今回の調査においても滝山団地自治会の皆様に多大なご協力を頂いたことに感謝申し上げます。